

經濟論叢

第110卷 第3・4号

大正期における地方自治変貌の一視点……………島	恭彦	1
河上肇における経済と人生……………杉	原四郎	17
河上肇と社会科学の方法……………山	之内靖	34
「辺境地」をめぐるソヴェト史学の最近の討論…保	坂哲郎	60
予算制度改革論の一原型としての GMの基準価格制の形成と管理機構……………小	野秀生	80
河上肇先生遺品展および記念講演会記事……………		103

昭和47年9・10月

京都大学経済學會

河上肇と社会科学の方法

山之内 靖

I 河上肇との私の出会い

先ほど末川博先生にお日にかかりましたところ、今度は若い者にやってもらいたい。自分の子供か孫の世代の人々から話を聞きたいのだというふうに伺いました。これからお話になる杉原先生が子供の世代だとすれば、私は孫に近いほうかも知れませんが、そういう孫の世代に近いような者にとって、河上肇という人はどういう意味を持った人物なのか。末川先生の御指摘もあることから、今日はそういう視点に即してお話をしてみたいと思います。そこでまず、私にとって河上肇というのはどういう人物なのかということ、その点から話の糸口を見つけていきたいと思います。

はなはだ申しわけないことでありますが、私が河上肇の著作について、まともにも研究の対象として、あるいは、ちょっと大げさにいえば研究者としての骨肉にかかわるような問題意識をもって接するようになったのは、ごく最近のことです。もちろん河上が持っていたさまざまな問題は、直接に河上の教えを受けた人々の言葉や、間接にその影響をうけた人々の書物を通して、私の頭にも入っていたわけではありますが、私が本格的に興味を感じ、勉強しはじめたのはごく最近のことで、実は1968年iraいのことであります。

ところで私が専攻しております学問はヨーロッパ経済史なのでありますが、そうしたヨーロッパ経済史の研究を開始するにあたって問題意識的な出発点になったのは何であったかと申しますと、それは何といたっても日本資本主義論争なのであります。この日本資本主義論争は、日本資本主義の性格規定という、すぐれて具体的で実践的な問題とつながりながら、経済学の方法をめぐる討論

の漁村を調査したときの記録は彼の論文「琉球糸満の個人主義的家族」⁴³⁾の背景をしめすものとして、また大正7年ごろに書かれた「マルクス・ノート」は彼の個人雑誌『社会問題研究』の創刊直前のマルクスへのとりくみ方をしめすものとして、最後に大正15年度における経済学史の講義ノートは、河上が講義した最後の学史⁴⁴⁾の記録であり、『資本主義経済学の史的発展』(大正12年)以後のマルクス研究の深化がその学史にどのような変化を生み出したかをしめすものとして、それぞれに興味ふかい。別の機会にのべたように⁴⁵⁾、こうした未公刊資料をふくめた真の意味での全集の刊行は非常な難事であり、とくにわが国ではそうである。だが河上の場合、天野敬太郎の、鏝骨の労作『河上肇博士文献志』(日本評論社、昭和30年)⁴⁶⁾があり、また白石凡や内田丈夫らの努力で出た『河上肇著作集』(全12巻、筑摩書房、昭和39—40年)があるのだから、そうした過去の貴重な実績をふまえて本格的な全集を準備することは、決して不可能ではないであろう。もしこうした全集が完成された暁には、本稿でその一端をしめそうと試みた河上独特の経済思想のひろさと深さとは、はじめて十分にその全貌をあらわすことになるであろう。

43) この論文は『京都法学会雑誌』第6巻第9号(明治44年9月)に発表され『経済学研究』(大正元年)に収録された。なお河上のこの沖縄旅行とそれが現地の人々に及ぼした影響については、比嘉春潮『沖繩の歲月』中公新書、昭和44年、56-58、166-170ページ参照。

44) 河上のこの経済学史の講義については、つぎの二つの文章を参照。古林喜楽「河上先生の最後の講義」『河上肇著作集月報』第8号、昭和40年1月、森戸太郎「河上先生と経済学説史」同月報、第11号、昭和40年4月。

45) 杉原「わが国における経済学関係の個人全集について」『経済資料研究』第5号、昭和47年5月。

46) この天野の労作については、杉原「『河上肇博士文献志』への一補遺」天野敬太郎教授古稀記念論文集『図書館学とその周辺』昭和46年、550-563ページを参照。

へと発展してゆき、さらに社会科学そのものの方法的基礎にまでかかわる奥深い問題へと及んでいったわけであります。そういった論争に触発されて研究生生活を選びとったというのが、まずは私の出発点だったのであります。ですから山田盛太郎とか平野義太郎とか、服部之総といった講座派の人々の著作、あるいは向坂逸郎とか、土屋喬雄といった労農派の人々の著作を、私は自分の研究者としての出発点において吸収すべき養分としてきたわけであります。

しかしその場合にも、戦後の新制大学に入って始めて研究生生活を開始した私にとって、日本資本主義論争は戦前におけるそれとはやはり違った新しい問題をかかえておりました。それは農地改革と財閥解体が日本の敗戦のあとで推し進められたという点にかかわっております。この農地改革と財閥解体、さらには憲法改正から労働諸立法の制定にいたる法改革が一体日本の資本主義にとっていかなる意味を持ったのか、したがってまた、それらは将来の日本社会の進むべき方向といかなる関係を持っているかということが、私にとっても主要な問題でありました。そこで、はるかに日本の農地改革、財閥解体、法制改革の意味を念頭におきながら、そうした問題の比較史的な根拠をさぐろうというわけで、ヨーロッパ市民革命史の研究へと進んでまいりましたし、またその延長上にイギリス産業革命の研究へと進んできたわけであります。

しかし1960年には、あの日米安保条約の批准に反対する運動が全国的に盛り上がってまいりました。そしてほぼその時期あたりから、そうした運動の中に自分も1人の市民として参加しながら、その中であらためて新しい問題の発生を感じとらずにはいられなくなったのであります。そのあたりから、日本資本主義論争を土台として、いわばその直接の延長上に問題意識を形成してきた私にとって、一つの転換点がやってきたように思われたわけであります。

『資本主義経済学史的発展』（1923年）を書き上げた河上が、その直後にはじまる榊田民蔵や福本和夫の批判をうけて、大きな方法上の転機を迎えることとなったことはよく知られた事実であります。それと比較するのはおこがましいとしても、それに近いような方法上の模索が私にも始まったわけでありま

す。ちょうどそのころ、有斐閣という本屋さんから近代日本における経済思想の発展を研究する講座本が計画されました。そしてその編集の責任をとっておられた長幸男さん、それから住谷一彦さん、この2人の方から強いおすすめがありまして、「大正デモクラシーとマルクス主義」という題で何かを書けということになったわけでありまして。西ヨーロッパ経済史を専攻しておりました私にとっても日本の問題が出発点となっていたことは先程も申し上げた通りだったのでありますが、何と云っても専門でないこうした領域に自分が筆を染めるということはいへんためらわれたわけでありまして。しかし、非常に強いおすすめやはげましをいただいて、何とか研究を開始することができました。

こうして「大正デモクラシーとマルクス主義」という課題にとり組むことになった私は、福田徳三と、それから河上肇というこの2人の人物を対比的に描き出しながら何とか大正デモクラシーというものがもった意味を明らかにし、同時にちょうどこの頃に本格的に展開しはじめる日本のマルクス主義思想とこの日本的なデモクラシー思想との内面的なかかわりを掘り下げてみようとしたのであります。ご承知の方もおられるでしょうが、福田徳三というのはマルクス主義者ではないのであります。日本資本主義がいよいよ一定の発展段階に到達し、それとともにさまざまな社会問題が発生してくる、この社会問題に対し、社会政策の立場からかかわろうとした研究者であります。福田徳三もまたその意味で日本の社会科学の発展にとって欠かすことのできない重要な人物であります。ちょうど同じ時期に、同じような問題を背景としながら、マルクス主義のほうから取り組んでいったのが河上肇だったのであります。

この2人は実は生涯にわたる非常な論敵でありました。しかし私の考えるところでは、激しい論敵でありながら、この2人はお互いにその論敵を尊敬しつつ、日本における社会科学の発展のために基盤を作りあげていったのであります。

ところで、この「大正デモクラシーとマルクス主義」という論文にかかわっているうちに、日本資本主義論争をどう受けとめるかということについて、私

が従来持っていた考え方と若干ズレるような問題が出てくるのではないかという気がしてきたわけであります。日本資本主義論争は、戦前の、ファシズムへと突入していく時代におかれた研究者たちが日本資本主義の理論的把握をめぐって展開した論争であります。ところが戦後曲がりなりにも農地改革、財閥解体を経ている日本、そういう状況の中で研究を開始した私どもにとりましては、日本資本主義論争だけではすまずことのできないその後の歴史的状況、新しい問題発生があります。つまり第二次大戦後の日本資本主義の新しい編成替と、その新しい装いのもとにおける日本資本主義の新たな発展があります。それから世界史的に見ても、日本やドイツ、イタリアというファシズム諸国が敗北したということ、あるいは社会主義が単にソビエト同盟だけではなくて、中国や東欧にまでひろがり、その結果としていくつもの国を包含する世界的な体制として社会主義圏が生まれ出たということも重要であります。

こうした第二次大戦後の変化との関連で日本資本主義論争をとらえ直してみよう場合、日本の戦後の状況の変化とか、あるいは世界史的状況の変化をつけ加えれば、日本資本主義論争が現在も生き続けるといえるのだろう。そういう考え方も一つ成り立ち得るかと思えます。

それからまた、それとは全く違って、すでに戦前における日本資本主義論争の当面してきた諸問題というのは過去のものになってしまったのであり、全く新しい問題次元に立って新たな日本資本主義分析が果されなければならない、という考え方も出てくるわけです。

第二次大戦後において日本資本主義論争がもつ意味を考える場合、大きく分けて以上の二つの考え方がありうるかと思うのですが、私自身はといえば、日本資本主義論争に対する二つの接し方のいずれをも、簡単に選択することはできないという感じがいたしました。と申しますのも、問題はもう少し深いところにあるのではないだろうかという疑問が拭いきれない。かといって自分にこの疑問を解くだけの準備はまだできていない。そんなわけで、いわば迷いの中にあつたわけであります。私が河上肇に接することになったのは、ちょうどこ

のような迷いのなかにある最中だったのであります。そして河上のさまさまの著作をあらためて本格的に研究するうちに、私は自分をとらえてはなさないある重要な問題提示を見出したように思ったわけであります。

II 科学的真理と宗教的真理の相関

その問題の提示の正体がどういうものであるのかということは、直ちにわかるというわけにはいきませんでした。「大正デモクラシーとマルクス主義」を書いていました68年から69年ごろには、そうした何物かがあるということに気づいてはいたのですが、その何ものかの正体を掘り下げて、自分なりに納得いく形でつかまえるというわけにはいかなかったというのが正直なところであります。

日本資本主義論争を振り返ってみた場合、日本資本主義をその根底において特徴づけているさまざまなカテゴリー(範疇)をどう規定するかということが重大な問題であったことはいうまでもありません。たとえば日本においては資本や、土地所有や、賃労働のそれぞれは、一体いかなる性格を持っているのか。資本については財閥という独自の性格を持った企業集団が中核をなしており、土地所有については、寄生地主制と呼ばれるような、日本社会の独自の伝統と抜きがたく結びついた関係が支配的に成立しておりました。賃労働につきましては山田盛太郎が「奴隸的」と特徴づけたような特殊形態が根底を制約しておりました。それは、大河内一男の表現によれば「出稼ぎ型賃労働」としての特質を根強く与えられたものでありました。そうした日本社会を構成する経済的諸範疇の特殊な規定性を追求してゆこうとする問題意識、あるいはそうした規定性の上に立って日本資本主義の構造的性質を全体としてとらえてゆこうとする問題意識、こうした問題意識は、主としていわゆる「講座派」の立場から提起されたわけではありますが、それに対する「労農派」は別の視点から、つまり日本社会の伝統と結びついた諸範疇の独自性は、日本社会の構造に規定されているというよりも、資本の運動法則そのものによって規定されているという視

点から、日本資本主義を把握しようとしたのであります。

このようなかつての日本資本主義論争における範疇規定や構造把握に直接にかかわるといよりは、河上は、実はそれ全体のさらに前提をなすようなより奥深い問題と終始かかわろうとしていたのではないだろうか。私にはどうもそのように思われてならなかったわけでありませう。

かといって、その前提をなすようなより奥深い問題というのは、河上が終始それにこだわりつづけたところの、例の利己心と利他心との間の相剋・対立の問題、あるいは経済と倫理との間の緊張をはらんだ相関といった問題に、いきなりそのままの形で直結するわけではない。いいかえれば、こうした諸問題は、河上の全人生を貫く実践的な問題関心の軸心をなしていたような、例の科学的真理と宗教的真理のかかわりという問題に根源をもちつつも、しかしそこに直接帰着するかというところもいえない。もちろん宗教的真理と科学的真理のかかわりという問題は、河上の学問的研究においてもこれを究極の起動力とするものであったということは見落としがたい重大なポイントであります。

そうした点についてはすでにいくつかのすぐれた先駆的研究がわれわれに与えられております。一方には河上の学問の中に流れ込んでいる東洋的な、あるいは儒教的な倫理の影響を研究した古田光の問題指摘（『河上肇』1969年、東大出版会）がありますし、他方でまた、河上の中に深く入り込んでいるキリスト教の影響と、それが与えた河上の学問内容とのかかわりについては、住谷一彦の注目すべき指摘（『日本の名著、河上肇』解説、1970年、中央公論社）が出ております。そうした研究によって示唆されるところは私にとっても非常に大きかったのでありますが、しかし、いわば宗教者としての河上個人の世界観にいきなり直結する問題ともいい切れないような思考の筋道が、河上の模索のなかになおかつあるのではなからうかと思われたのであります。

もう少しいいかえてみますと、この両者の中間、つまり一方における範疇規定に基礎をおいた経済的な構造把握という、すぐれて経済学の具体的展開にかかわるような部分と、それから科学的真理と宗教的真理の緊張と相関という、

河上の行為のダイナミズムを内から突き動かし、方向づけていった世界観的な苦悩ともいうべき部分、この兩者の間において、この兩者をいわば媒介するような領域があったのではなからうかと思われてきたのであります。

よくいわれることですが、河上の思想や行動には非常に大きなブレが見られるわけです。思想的には、熱烈な保護関税論者だったにもかかわらず、手の平をかえたように自由貿易論に移ってしまったり、家族や職をなげうって無我苑という道場にとびこんだりする。政治的には大山郁夫の同志として共に労働党で活動しておりながら、ある時期からはまことに激しい大山批判をあえておこなうといった点が指摘されます。パーソナルな人間関係のなかでも、他人を信用する点ではまことに素朴な率直さをもっている反面では、いったん気に入らないと、自分の側の誤解には反省を加える余裕がない程にかたくなであったといわれております。河上のこうした点については多くの人々が異口同音に指摘しているところであり、河上が生涯にわたっていろいろ考え方を変えていく、その考え方の変化の振幅の大きさは、たしかに河上という人を研究する場合に見落とすことのできない一つのポイントであると思います。そうした振幅の大きさは、悪くいえば変化絶えざることのなかった軽率な人物というふうにとらえられますし、よくいえば、研究の深まりによって得られた思想の成長を実践と結びつける努力が、常にはらわれつづけたというふうにとらえられる。

しかし私が申しあげたいところは、こうした振幅の大きさにかかわらないような、あるいはそれを越えたような問題があったのではなからうかということでもあります。つまり、もっぱら客観的に、対象的な世界の論理構造を追求し、科学的真理をあきらかにしようとする社会学者としての河上が一方にあり、それに対してむしろ主観的に、個人のいわば実存的な内面にかかわる問題を深めてゆこうとする宗教者としての河上が他方にある。しかしながら同時に、こうした客観と主観の、そのままでは互いに大きくかけ離れてしまった世界を結び合わせ、その間をつなげてゆこうとするような、非常に奥深い問題が、河上の著作活動や思想の発展の中で、一本の金線のように初期から後期に至るまで

貫いているのではなからうか。私にはそう思われるのであります。

問題を逆の面から照し出してみると、こうもいえるかと思えます。この客観の世界と主観の世界を結び合わせる媒介項を追求しようとする努力を、一定の時期以降の河上は放棄してしまったのではなからうかと思われる。あるいは放棄せざるを得ないような、非常に困難な条件のもとに置かれてしまったのではなからうかと思われる。そのときに、彼の思想をその内面の最も奥深いところで方向づけていた科学的真理と宗教的真理の相剋という問題は、対立しあいながらも強く牽引し合う緊張した相関を場合によっては失ってしまって、科学的真理が宗教的真理と同一化してしまったり、あるいは科学的真理と宗教的真理が相互にかけ離れた二元的なものになってしまうということも起ったように思われるのであります。

勿論、アカデミズムから離れて政治的实践の世界に入ってしまった河上の、自己の思想に対する倫理的な誠実さ、あるいはその勇氣というものは評価されなければならぬし、そこからくみ取ってこなければならぬものも多いわけがあります。その点を評価し、そこから学ぶということを軽視してはならないのは当然のことですけれども、と同時に、いわばこの清水の舞台から飛びおりるほどの大きな転身の中で、河上が単なる誠実さだけでは処理しきれない政治の世界の複雑で困難な諸問題に対し、どこまで徹底して自覚的に対しえたかは、問題が残っているであります。

ともあれ、ここで私が申しあげたいことは、研究者としての河上が一貫してもち続けたところの、客観的な対象的論理の領域と主観的な世界観の領域とを媒介させる努力というものは、いってみれば河上なりのしかたでおこなわれた社会科学方法論の探究にほかならないということなのであります。

III 方法論的發展の時期区別

そこで河上の方法論的な発展という問題について話を進めてみたいと思えます。ところで方法論学者としての河上というこの私の問題の立て方は、あるい

はきわめて奇異なこととして響くかもしれません。といいますのも、たとえば櫛田民蔵による河上批判は、厳密な客観科学としての社会科学の領域に主観的な倫理や道徳を無媒介に混入してしまったということについて鋭い批判を加えたものでありましたし、それから福本和夫が行ないました河上批判は、ヘーゲルからマルクスへと継承されていった弁証法についての哲学的な無理解を河上についてきびしく問うものでありました。そしてまた同時に、あの『資本論』の方法を規定している独自の構成、つまり感性的な現象の世界から一たん抽象的な基礎範疇へと掘り下げていって端緒範疇としての商品に至りつく。その端緒範疇から再び論理的な上向を経つつ、最初は混とんとした表象としてあったにすぎない感性的な世界を、思想のなかで批判的に、したがって真の意味で具体的な現実性として再把握するというあのマルクスの方法、これが河上にあっては全く理解されていないということを、福本はきびしく衝いたのでありました。

そうした櫛田や福本の批判がちょうど1924年(大正13年)という年に集中的にあらわれることとなり、河上に非常に大きな思想的な衝撃をあたえるようになったこと、この時の河上の苦悩は、正に河上自身が『資本主義経済学の史的発展』のなかでジョン・スチュアート・ミルについて指摘したところの精神上の危機に匹敵するようなものであったことは、衆知のところであります。そうした点からも知られておりますように、およそ方法論学者としての河上は落第だったのではなかろうかというのがむしろ通説といってよいかもしれません。

ところが私の見るところでは、比較的初期の時点に属する1911年(明治44年)から1914年(大正3年)にかけて、「日本独特の国家主義」、『時勢の変』、「西洋と日本」という一連の注目すべき著作が書かれます。主としてこの三つの著作に代表されるこの時期に対し、後年の河上の、アカデミズムにおける研究活動のいわば最後の時期を飾るともいえるような時点で、これまたいくつかの大変注目すべき論文が書かれます。それは「マルクスの謂ゆる社会的意識形態について」という京都大学『経済論叢』に載せられた論文であり、またそれに続

いて書かれたところの「再びマルクスの社会的意識形態について」という論文なのであります。この二つの論文は1926年(大正15年)と1927年(昭和2年)の兩年にかけて発表されており、大きく間を隔てるこの二つの時期について、河上の思想活動を対比してみる。そしてまたこの二つの時期の、一見すると非常に異なった表現をとっている問題点について、その間の関連を丹念に掘り下げていってみますと、実はこの二つの時期をつなげるような形で、河上の思想活動が営々と一つの脈動を保って息づいていたことがだんだんと気づかれてくるのであります。

河上自身がどこまでそうした問題を社会学方法論にかかわる追跡のプロセスだと自覚していたかは別の問題といたしまして、河上から学び、河上を研究するという立場に立つ私どもとしては、研究の対象として、そうした営々と息づいていた脈動の過程を掘り下げ、跡づけていく必要があると思われるのであります。

そこでごく簡単に、それも私なりの興味に即する限りにおいてであります、河上の著作活動について時期区分のようなものを申し上げてみたいと思うのであります。

大きく分けて、第1期、第2期、第3期という三つの時期を考えておきたいと思ひます。第1期は1905年(明治38年)から1907年(明治40年)ごろまでと考えておきたいのであります、その時期には『日本尊農論』あるいは『日本農政学』という日本の農業問題にかかわる興味ある著作が書かれたと同時に、彼自身が『日本経済新誌』という雑誌を主宰して発刊しております。この時期はまたご承知のように、田口卯吉が主宰しておりました『東京経済雑誌』と対抗しながら、田口が押し出していた自由貿易主義に対して河上が強く日本における保護主義的な政策の必要を主張していた時期であります。この時期もまた、河上の思想形成にとって重大な意味をもっていたわけで、その点については内田義彦の「明治末期の河上肇」(『日本資本主義の思想像』1967年、岩波書店)が注目すべき論点の整理をしてくれておりますし、また住谷一彦の「河上肇と柳田国

男」(『河上肇研究』1965年、筑摩書房)は、河上と柳田という二人の巨人の日本農業問題へのかかわりを介して、日本資本主義分析における経済学と民俗学の相関という誠に興味深い指摘を提出しているわけであります。そうした意味においてこの第1期は、河上の方法的発展の起点として独自の意味を持っているというべきでしょう。しかし私としては、自分の個人的な研究のプロセスに規定されて、第2期から手をつけ始めたのであります。

第2期としては、ひとまず1911年(明治44年)から1913年(大正2年)に至る時期を考えておきたい。これは先ほど申しました「日本独特の国家主義」であるとか『時勢の変』、あるいはヨーロッパ留学中に大阪朝日新聞に寄稿していた「西洋と日本」——これは後に『祖国をかえりみて』という著作の中にまとめられたわけでありますが——そうした著作に代表されるような時期です。

第3期は1917年(大正6年)の『貧乏物語』に始まり、そして1923年(大正12年)の『資本主義経済学の史的発展』に至りつく時期、および、先ほど私が指摘しました例の「マルクスの謂ゆる社会的意識形態について」という論文やそれにかかわる一連の論文が書かれた時期、この二つの時期を小段階として内に含んだ時点だと考えております。

以上、第1期、第2期、第3期を分け、そして第3期を小さく二分してみたわけでありますが、この三つの時期区分について、これもごく簡単にであります。山田盛太郎が『日本資本主義分析』(1934年、岩波書店)の中で指摘した日本資本主義の段階規定と照らし合わせながら整理しておこうと思います。河上の以上のような方法的展開過程は、日本資本主義の発展という社会史的背景とのかかわりでどのような意味をもっていたかを確認しておこうというのが、ここでの眼目であります。

山田盛太郎の『日本資本主義分析』によりますと、資本関係創出の過程、つまりマルクスのことばでいえば本源的蓄積の政策的推進の時期であります。これが第1の段階である。これは明治維新に始まり、その後明治20年代まで続きます。それから明治30年代から40年代にかけての、日清・日露の両戦役を貫

く時期がやってくる。この時期には日本的な型に即して推し進められた資本主義の構築が一応その型を確定するわけでありますが、この型の確定は、いうまでもなく日本における産業資本の確立をも意味したのであります。

ところで、山田の『日本資本主義分析』について見落としてはならないのは、それがしばしば歴史的発展の論理を内包しないというふうに批判されているにもかかわらず、私の読む限りでは全くそうではなくて、いまいましたように、日本資本主義の発展段階という問題意識を強く持っていたということでもあります。その点については以前に私が整理する機会をもちましたので(拙著『イギリス産業革命の史的分析』1966年、青木書店参照)、興味ある方はそれをみていただきたいのでありますが、ともあれ、この産業資本確立期に次いでやってくるのが「一般的危機との連繋」あるいは「型の分解」として特徴づけられる時期であります。この「型の分解」という問題を山田がどういうふうにとらえていたかと申しますと、例の軍事工業とキイ産業の強靱なる統一性を旋回基軸として生み出されてきたところの日本資本主義の独特な型、独立自営農民の形成を歴史的土壌として生み出された西ヨーロッパの下からの自生的な資本主義とはおよそ性格を異にするところの、天皇制絶対主義の政治的な権力を軸心として形成されたこの日本資本主義の独特な型は、先ほどいいましたように明治20年代から40年代にかけて一応その確立をみた。ところがその型が分解の危機を内包し出すのがそれに続く時期だとされているわけです。

日本の経済力の限界までかけてたたかわれた日露戦争は、戦勝にもかかわらず、その後に深刻な戦後不況を迎えます。この日露戦争後の戦後不況は、困難をきわめた経済的沈滞の中で、特に農業における矛盾を顕在化させてまいりました。そうした危機を背景として、1910年(明治43年)には例の幸徳秋水らの事件、あの「大逆事件」がもちあがります。この「大逆事件」は、その後における日本社会の暗転を予告するような不気味な地鳴りであったといえましょう。その時期を一つの序幕といたしまして、大戦中の未曾有な、しかし明らかに異常なブームを間にはさみながら、第一次大戦後には日露戦後のそれをはるかに

上廻る大規模な不況がやってまいります。この第一次大戦後の崩壊とともにおとづれてくるところの日本社会の根底からの動揺が、山田盛太郎のいう「一般の危機との連繫」における日本資本主義の「型の分解」であります。そういう「型の分解」の危機の中で、特に農村解体はいちぢるしく進展し、日本社会の政治的安定を保証していた日本型の「ナポレオンの観念」の基礎が解体してくる。あるいはまた、日本の賃労働の特殊性を根底において規定していたもろもろの労役型の解体といった問題が一挙に噴き上がってくる。これが日露戦後から第一次世界大戦後にかけての時期であると『分析』ではいわれているわけがあります。

考えてみますと、私が注目したこの第2期、つまり1911年から13年というのは、ちょうど日露戦後において日本の農業危機が顕在化し、それとともに日本社会の「型の分解」の危機が最初に顕在化した時期であったわけです。

以上の点との関連で考えてまいりますと、『日本尊農論』、『日本農政学』、『日本経済新誌』が出された河上の第1期というのは、山田の『分析』にみられる時期区分からすれば、すでに日本資本主義の型が決定されてしまった時期にほかなりません。しかし河上の主観的な認識の中では、ともに可能性をもった二つの型が、なおかつ意味を持って併存し、相争っている時期ととらえられていたように思います。そういう意味で財閥型の発展方向の上に乗っかって自由貿易的啓蒙活動を行なっている『東京経済雑誌』と対抗しながら、日本における資本主義発展の小農民的な可能性、いってみれば独立自営農民としての発展を内包する型の可能性に賭けていた時期がこの第1期なのではなかろうかと思われます。この第1期には、河上の問題関心は確定した型の内部に発生する諸問題に向けられるというよりは、型が相争われつつあるということに関心の主要な焦点があったわけです。

ところが第2期になりますとすでに型は、財閥主導型の方向で確定してしまいました。そうした財閥主導型の方向で確定してしまっただけな日本資本主義のただなかに、大きな激変がこようとしている。『時勢の変』がやってこようとしている。

これが第2期における河上の問題関心であったと思います。そういう意味でこの第2期というのは、型の認識に関する問題が前面に出てくると同時に、「型の分解」の危機が河上の思想活動の中で大きな問題として浮かび上がってくる時期であったということができると思います。

次いで第3期になりますと、そうした型認識のなかで、あるいは「型の分解」の危機のなかで掘り下げられていった方法論が、方法論そのものとして独自に押し出されてくる時期がやってくる。そうやってよいような気がいたします。型認識の問題に裏付けられながら、方法論がそのものとして押し出されていった一つの成果が『資本主義経済学史的発展』である。これはイギリス経済思想史を具体的な材料としながら、この具体的な材料を加工するという形で方法論の展開を試みたものであるといえますが、いま一つ「マルクスの謂ゆる社会的意識形態について」と、それに関連する一連の論文は、マルクスのあの『経済学批判・序言』に展開された唯物史観の公式といわれる部分について、河上なりに独自の形でこれを読み取ろうとしたものにほかならない。そこでは問題は『資本論』の方法を全体として特徴づけている疎外や物象化の確認にまで及び、そうした点との関連でマルクスを理解しようとする志向がはっきりと姿を現わしてくることになります。

IV 日本社会の型と人間類型

許された時間も短いので、ごく簡単にお話しする以外にないのでありますけれども、以下、私にとって最も関心度の高い第2期をとりあげ、そこにみられる「型の認識」と「型の分解」の危機の自覚について簡単に触れまして、それがいかなる意味で独自の社会科学方法論というべき内容を有しているかについてのべてみましょう。

「日本独特の国家主義」とか、『時勢の変』「西洋と日本」という諸論文の中で河上がとらえようとしたことは、日本における資本主義の「型の分解」の危機にほかならなかつたことはいうまでもないのであります。しかし河上の

問題関心は、実は日本だけに限定されない広がりをもっていたのであります。ちょうどその頃、河上はヨーロッパに留学し、ドイツやベルギーやイギリスをへめぐってきている。最初ドイツに行ったのでありますけれども、第一次世界大戦が勃発した。ところがその当時日本はイギリスと同盟関係にありましたためにドイツにはいられなくなってイギリスに移ったのであります。河上は第一次大戦の最中のヨーロッパをへめぐって、ヨーロッパにおける資本主義の末期的状況を目の前にしてきている。あるいはこの末期的状況に対応しようとする資本主義の転換の努力を、つぶさに眺めてきている。イギリスでは特に、資本主義によって生みだされた困難な問題を資本主義の体制そのものが取り上げざるを得なくなった点を注目してきているのであります。こうして河上の目は、イギリスにおける社会政策の発展にむけられておりました。留学直前に書かれたものではあります、『時勢の変』という大変にユニークな著作は、単に日本における『時勢の変』をとらえるにとどまらず、さらに資本主義の世界的な規模における『時勢の変』を問題にするものであったことは、その意味で注目してよいと思います。

ところでこの時期の河上は、資本主義を一つの体制としてとらえてくる場合、生産関係の側面からというよりはむしろ生産力の側面から、しかも機械という資本主義が生み出した物的な生産力のシステムに注目しつつ、機械体系に即してつかまえようとしております。この点は、一面ではたしかに資本主義体制を一つの社会関係としてとらえる視点をくもらせるものであったわけで、その限りでは、後に河上のマルクス主義に対する理解が深まるなかで克服されねばならぬ問題をはらんでいたのであります。だがしかし、この機械体系としての資本主義は、何故に日本には独自の力で生みだされることなく、西ヨーロッパにおいてのみ自生的に生みだされてきたかを問い、その根源を日本と西ヨーロッパの間にみられる人間の類型的な差異にまで掘り下げて明らかにする、という視点を確定しえた点で、この時期の生産力的分析視点はなかなか重要な問題を探りあてていたというべきであります。しかもここで注目すべきことは、人間

類型の差異にまで掘り下げて、いわば比較文明論的な基盤から資本主義を批判的に分析しようとするこの態度は、後に資本主義を生産関係的視点からとらえ直すようになった時点においても、河上の基礎的な視座として生きつづけたということでもあります。

河上はつぎのようにのべております。日本とイギリスとは、同じ資本主義といっても非常に型の違った社会なのでありますが、しかし、機械工業の急速な発展とともに『時勢の変』をよびおこすような危機に当面することとなる。機械というのはその急速な普及とともに社会のあり方を変化させてゆき、社会を根本からゆり動かす危機を生み出す原因となるのですが、しかし他面ではそのことは機械が近代社会における生産力の根底を担う存在であることを示している。河上は発展の原動力であるという点と、危機の根源であるという点を二重にダブらせながら、そうした生産力のにない手としての機械は一体いかにして生み出されたのかを問うてまいります。

そうした問題を終始念頭におきながら、日本とヨーロッパの比較を試みている河上は、さまざまな興味ある論点を提示しているのですが、なかでもヨーロッパに着いて間もないころ、古典バレエを見に行った時の感想は卓抜であります。河上がそれまで接していた踊りというのは日本舞踊だけだったと思うのでありますが、ヨーロッパに初めて行って古典バレエを見てたいへんにびっくりしたらしい。そしてヨーロッパの舞踊の踊り方と日本舞踊のそれとはどうしてあんなに違うんだろうかということを考えて一文を草しております。それによれば、ヨーロッパの舞踊というのは、結局点と線を基本的な単位として、それらをつなぎあわせたものに他ならない。つまり人間の手足の運動のさまざまな局面を点と線に一たん分解した上で、この点と線をいかに組み合わせるかという工夫を通して一つの美的な運動を構成してゆくのが古典バレエの行き方です。ところが日本の舞踊というのは、これと較べてみると、いつどこでとどまって線になり、点になるか、あるいはどこで決定的な基本型をなすかという点は必ずしもはっきりしない。常にまろやかな曲線を描いてとどまるこ

となくある動作が次の動作へと自然につながっていくようなものであるということを書いております。

つまりそうした観察の中で河上は、書物のなかから得られた学問的知識によってはむしろ得られないようなもの、舞踊に代表されるごく日常的な、市民たちが普通の生活のなかでおこなっている活動に注目しているのであり、しかもこの市民の普通の日常生活のなかに、日本とヨーロッパの根本的な違いを示す何物かがひそんでいる、とみているわけです。たとえばA・B・Cから成り立っているヨーロッパ人の文字をとって考えてみても、ヨーロッパの文字は一つ一つとってみては意味を持たない単なる記号なのですが、しかもその記号を組み合わせて一定の意味のある「ことば」や「文章」がつくりあげられることとなる。こうしたヨーロッパの行き方に対して、中国や日本では文字は元来一つ一つがそれ自体として意味を持っている象形的なものでありました。

そうした文化の違い、それはヨーロッパとアジアにおける民衆の日常生活そのものの相違に根ざしており、民衆の日常生活における意識の相違から出てきたものである。河上はそう考えたわけです。ところでヨーロッパにおける市民生活の日常は、日々に繰り返されているその繰り返しのなかで無意識のうちにある一定の手続をふんでいる。その手続というのは、河上にいわせれば、すべての意味あるものを、単純な、それ自体としては無意味な基礎単位に一たん分解して、そして再びそれを綜合するという形で文化を構成しようとするものである。これがヨーロッパ文化というものの特質ではなかろうかと河上はとらえております。実はヨーロッパで機械が生み出されたということも、手工業の中で行なわれているさまざまな複雑な動作を、一たんそれ自体としては無意味な、単純な基本運動の過程に分解してみて、そうした分解された過程を再び綜合していくという操作の繰り返しの所産にほかならない。いわば舞踊の世界で行なわれているのと同じことが経済の世界でも行なわれるとなると、これが機械を生み出すことになる。こういう観察をしているわけです。ところが日本では日常生活の文化的な基礎からしてヨーロッパ流の分析→綜合という手続とはなじ

まないのであり、むしろそこでは直覚的綜合とでもいうべき感覚が優位をしめている。そのために日本では機械は生み出されなかったというわけです。

この舞踊論が労働についての文化人類学的な考察と結びつけられている点も、大変に卓抜であると思います。河上は、踊りというのは、考えてみると、もともとは労働と区別できないようなものであったといっております。舞踊と労働との関係を、河上は自分が子供の頃にたのしみにみていた正月の餅つき行事を例にとって巧みに説明しております。河上が子供のころには毎年正月になると庭にうすを持ってきまして、近所の若い衆やあるいは餅つきの職人などがやってくるお餅をついた。この餅つきは、いかにもたのしげな歌や威勢のよい掛け声にあわせておこなわれていたのであります。この餅つきの例からもうかがえるように、労働というのはもともと歌謡が生みだされる場であるとともに、舞踊のリズムの発生の源でもある。だから踊りという日常の市民生活の中で楽しまれている活動と、経済の領域において基礎的な意味を持っている労働との間に非常に深いつながりがあるのも、或意味では当然だということを河上は発見したのであります。踊りの様式の違いは労働の様式の違いであり、この両者はともに機械が生みだされるか否かという点に深いつながりをもっているということです。

そうした違いについての認識は、同時に日本社会の基礎をなしている家族関係と、ヨーロッパ社会の基礎をなしている市民的で個人的な関係との違いの認識となって発展してまいりました。日本社会においては、人びとは家族という血縁的なつながりの中でお互いに一つの倫理的な血縁共同体をなし、その中で深く一体感を保ちながら生きていたのであります。ところがヨーロッパでは夫婦の間でさえも借金証文が取りかわされるということをいって驚いております。私などはもう夫婦の間の借金証文を取りかわす世代の人間でありますけれども、つい一昔前までは、日本では夫婦の間に借金証文を取りかわすというようなことは絶えてあり得なかったことであります。

それからヨーロッパに行ってみて河上が驚いたことの中に、鍵をかけるとい

う習慣がある。アパートに行って住んでみますと、アパートの建物の大きな鉄柵の門に鍵がかかっている。自分の部屋に行きますとまた自分の部屋の入口にも鍵がある。さらにまた個人の居室にも夫婦それぞれ鍵を持っているというふうに、鍵の中で生活しているヨーロッパ人の生活と、障子と畳のなかで、お互いに家族である限り分けへだてなく共に生活している日本の家族的関係との決定的相違というものを考えて、ここにもやはり人間の生活を基礎的な諸個人に分解しないではいられないヨーロッパの場合と、日本における倫理共同体的な家族社会との、基盤の違いを強調しております。

こうした比較は、一方でヨーロッパのみが自生的に機械を生み出し得たという意味において、ヨーロッパ市民生活の中に内包されている生産力的基礎の評価とつながっていたわけですが、しかし他面では、河上の場合、そうした機械文明の行きつく果てに生み出されてくる資本主義社会の退廃を考察するという視点も同時に存在していたのであり、ここでは逆に日本における倫理共同体の持つ意味が、ヨーロッパ近代の危機との対比のなかで浮び上がってくることであります。河上における文明比較の視点は、こうして、西ヨーロッパの価値規準と日本的価値規準が彼自身の精神の内面で、せめぎあっていたという事実を背景として生まれてきたのであります。その意味で、それは単なる静態的な比較にとどまるものではなく、河上の実践的関心と深くかかわる脈動を保っていたというべきでしょう。

そうした問題意識の中で、たとえばこういう形で日本の社会の批判も行っております。ヨーロッパにいてまず感じられることは、ヨーロッパ人は家族を持たない、「家」というものを持たないということである。ヨーロッパ人は、日本的な意味における家族を持たない。ところが日本人は非常に家族を大切に、自分の「家」を大事にする。だから日本の「家」に行ってみますと、小さな庭しかないにもかかわらず、その庭の中には非常にみごとに植木が植えられ、そして床の間には壺があって、ちゃんと活け花が活けられている。そして家の中には決して土足で上がらずに畳を敷いてきれいに生活している。日本人は実

に清潔な生活をしている。ヨーロッパ人が家の中に土足で上がるという習慣は、河上にとってもたいへんに奇異なことと感じられたらしい。しかし一たん市民生活というレベルで考えてみると、問題は全く別様にみえてくる。たとえば公園に行ってみますと、公園にある花を折ってうちに持ってかえるというような人間は絶対にいない。ところが日本人はといいますと、たとえば公園に桜がみごとに咲いておりますと、その下で酒を飲んで楽しくやります。それだけならいいんですが、帰りについてにその桜の枝を折ってうちに持って帰り、自分のうちの床の間の壺にさすというわけです。考えてみますと日本人は血縁的な倫理共同体としての家族を持っているけれども、他面ではそうした家族関係の中にあまりにも閉塞されているために、市民社会としての開かれた世界を持っていない。だから日本人は公園をつくることもできないし、うちの中をあれほどみごとに整理する日本人が、道路をどろんこのままいつまでも放っておくという環境が許されている。河上はこんなふうな観察を下しております。それに対してヨーロッパ人をみてみると、彼らはあたかも都市生活全体を一つの「家」となしているかのように思われます。ヨーロッパ人は「家」を持っていないともいえるけれども、他面では都市生活全体が一つの「家」であるといういい方をしております。

そうした指摘を見ますと、たとえば今日における日本の公害問題が、ヨーロッパと同じような意味の公害として現象しているのはいうまでもないことですが、しかしどう考えてみてもヨーロッパのそれとは比較を絶するほどの悲惨な問題として浮かび上がってきているという事実とのつながりが浮び上がってくるように思われます。河上がこの時期に指摘したような問題点、つまり日本における血縁的な家族共同体の強固さ——それはマイホーム主義という一見「近代化」された形や、高度に発達した株式会社を基盤として「三菱一家」「住友一家」が形成されるというような擬制的形態でなお持続されています——が、開かれた世界としての都市生活＝市民的社會生活を欠落させているという批判点は、いまなお生きているのではないのでしょうか。

こうして第2期以降の河上は、ヨーロッパと日本との人間類型の差異という問題を基礎に踏まえて考察を進めてゆくこととなりました。ヨーロッパ的な人間類型は、一方では機械文明を生み出すというポジティブなものを示しながらも、機械文明のさらなる発展の中から資本主義の危機というネガティブな面をも生み出してくる。ところでこの機械文明は、日本における独自の血縁的家族関係の上に移植されることによって、ヨーロッパ資本主義が抱えたそれとはまた別な意味で、特殊な資本主義の矛盾・危機を生み出してくる。河上はこのようにみていたといつてよいでしょう。

機械文明を生産力の人間学的考察からフォローしていこうとする視点がこの第2期に特徴的に姿を現わしたわけですが、この視点は、その後における河上のすべての研究活動の根底において生きつづけたのでありました。この視点の延長上に、第3期になりますと人間類型を基盤として資本主義を生産関係の面からとらえるという発想が生まれてくる。例の『資本主義経済学史的発展』でいわれておりますように、個人主義経済組織の展開の中から資本主義経済組織が生み出されてくると河上はみるわけです。個人主義という人間学的考察をふまえて、階級社会としての資本主義をその上に成り立っている層として立体的にとらえるあの視点は、第2期における人間類型から機械文明へという発想の展開形態にほかなりません。この第3期において、河上の認識は生産力の人間学的考察から生産関係の人間学的考察へと発展してゆきました。

人間学的な考察を基礎として資本主義をとらえようとする河上のこのアプローチは、マルクスの唯物史観の公式でいえば経済的土台構造と上部構造というあの社会の建築学的な区分をどう理解するかという点について、独自の問題を投げかけるものでありました。マルクスがとらえているあの経済的土台構造、これはいいかえれば市民の日常的な生活過程であるわけですが、この市民の日常的な生活過程における人間の苦みは決して単なる物質的利害状況に規定されたものでもなく、あるいは物象的諸関係に解消されるものでもない。むしろマルクスのいう経済的土台構造そのものの中にこそ、真の意味での人間の生きた

営みがある。人間の生命の表現の歴史的なありようは、その本原的形態においてはまさにマルクスのいう経済的土台構造のうちには含まれているのではなからうか。そう考えてくれば、この経済的土台構造の中でも人間の意識の活動が抜きがたい重要な側面を持ったものとして組み込まれているといわねばならない。河上のことばでいえば、社会的意識は経済的土台構造の中に「織り込まれている」というふうを考えざるを得ないのではないか。こうしたユニークな唯物史観の解釈を押し出したものが、彼のあの晩年の「マルクスの謂ゆる社会的意識形態について」という論文にほかならないのであります。この河上の独自の唯物史観解釈は、日常的な活動の意識とイデオロギーの区別という点を見逃したまま、意識一般を上部構造に属するものと考えてきた大方のマルクス理解に対し、あらためて反省の材料を提供するものだと考えられます。方法論学者河上の復元が、現在の時点でなお要請されるゆえんであります。

河上は、『貧乏物語』が書かれたときに示された榎田民蔵の批判、そしてまた『資本主義経済学史的発展』が書かれたときにあらわれた、これまた榎田の鋭い批判を転機として、大きく思想的な前進をすることとなりました。そういう意味で榎田の批判が河上の思想の発展をうながす契機となったことはもちろん重視しなければならない点であります。しかし考えてみますと、河上の思想の歩みは、榎田の批判をきっかけとして次々と変わってゆき、榎田の導きによってマルクス主義に接近していったという点においてばかりではなく、むしろこれをきっかけとして社会科学方法論の探究をより一そう深めていったという側面において再検討されなければならないように思います。人間学に基礎をおいた社会科学方法論の模索という点、この点は、たとえば小農民の経済的発展を促進しようとする保護貿易主義者としての立場から、世界市場への帝國的進出を考える自由貿易主義の立場に変わり、そこからさらにマルクス主義にまで進んでゆくというふうには、河上の思想表現の表面における非常に目立つ転身がみられるにもかかわらず、むしろ常に変わることのない主題として追求され続けたテーマでありました。

V 結 び——日本資本主義論争の意味と関連して——

たいへんに舌足らずであります。最後に結論めいたことを簡単に申し上げておきたいと思えます。こうして私は、河上が、その思想の表面上の衣裳の取りかえにもかかわらず、終始変わらず一貫して追求した問題意識をフォローしてみたわけですが、しかし、ここで考えざるを得ないのは、こうした河上の貴重な方法的成果がその後において継承されぬまま、今日にいたったという事実の意味にほかなりません。ご承知のように、日本におけるマルクス主義は河上の啓蒙活動を通してその基礎を与えられ、それ以後発展をとげつつ、日本資本主義論争に代表されるようなレヴェルの高い成果を生んだのであります。だが、にもかかわらず、日本におけるマルクス主義の展開の中で、人間学を基盤とする社会科学方法論の追求というこの河上の問題の掘り下げは、一定の時期を境としてある意味では雲散霧消といえますか、解消してしまったのであります。ここに大きな問題があったのではなかろうか。

たしかに河上の提起しようとした問題は、部分的には福本和夫や三木清のなかに継承され、流れこんでいったのであります。福本と三木は、ともにある面において非常に激しい河上への批判者でありましたが、しかし河上が出そうとしたものと本質的には同質の問題をこれらの人びとが抱いていたことも事実であります。たとえば福本和夫の『経済学批判の方法論』を読みますと、そこには河上に通ずる人間学的基盤への関心が見られると思うわけですし、三木清には「人間学のマルクスの形態」(『思想』1927年2月)という興味深い論文があります。こうした事例にみられるように、人間学を前提とし、あるいは基礎として踏まえた経済学批判の体系的理解が河上以後の世代に生まれていたにもかかわらず、それらを哲学的に清算してしまうような事件がやがてもち上ります。いわゆる福本イズムの「克服」、三木哲学の「清算」がそれでありました。福本や三木の思想と方法に欠陥があったことは事実としましても、ここでの清算的批判は、同時に、河上によって定礎された独自の意味をもつ社会科学方法論

の探究を断ち切ってしまう結果ともなったのであります。

考えてみますと、日本資本主義論争は、河上が提起した問題が哲学的に清算されてしまい、継承される可能性を失った後において、始めて本格的に開始されるわけです。あるいはこういきってしまったては、それはいいすぎであって、河上が提起した人間学的課題は、資本主義論争でいえば講座派の中に思想的に継承されているとも考えられる。事実河上は、この講座派的な問題意識の先駆として日本農業問題の分析をおこない、第1期には『日本尊農論』『日本農政学』『日本経済新誌』の中に結晶させておりますし、その後農業保護主義の観点こそ捨てましたけれども、たとえば1923年に『我等』という雑誌に掲載された「わが国農村の資本主義化」という注目すべき論説の中で、たしかに32年テーゼの先駆をなすと思われる発想を独自に展開しているわけです。

そういう意味で、河上から講座派へというつながりは明らかに認められるのでありますけれども、しかしにもかかわらず、日本資本主義論争の中で講座派が受けとめた人間類型の問題は、河上の場合にそうであったような歴史形成主体の内面的価値規範に即した問題関心からズレてゆき、やはり客観の対象の世界の中に追いやられて、そこに限定されてしまっていたのではないかと考えられます。もちろん社会科学の対象として人間類型の問題を取り上げるという以上、これを客観的な対象として取り上げなければならないことはいうまでもないわけですから、これを客観の対象の世界として取り上げること自体は決して間違いではない。しかし考えてみますと、人間学的な問題が客観の対象の世界の中の重要な一環をなしているということを指摘した講座派は、にもかかわらず、こうした人間類型の歴史的な展開を考察し、さらに日本的なその特殊な基盤がどう解決されてゆくかという、その解決のプログラムを考察するに際しては、労農派と同様に、対象の世界の中における経済の必然的法則性にもたれかかるという客観主義から脱してはいない。物的で機構的なものを中心とする生産力の発展がおのずから歴史必然的に問題を解決していくのだという暗黙の前提が、講座派・労農派の共通の前提としてあったのではないかと思います。

そうした形でとらえている限り、一般的危機の発現の中で噴出してきた日本農民層のエネルギーや、農村を基盤とした日本の特殊なプロレタリアートの問題状況がもつ意味を解明し、さらにこのエネルギーをくみ上げていくという点で、積極的な構想が生まれ得る余地は限られたものとなってしまったと思われる。むしろこの間隙を縫うようにして、ファシズムがこれら被抑圧階級のエネルギーを吸収してしまったという一面も否定できないわけで、この点の反省を抜きにしては、日本資本主義論争の意義を語ることはできないでありましょう。

今日のわれわれの目前には、マルクス主義をも含めて、従来の通説的な方法上の枠組をもってしては必ずしも十分にとらえきれない新しい状況が、次々と展開しております。こうした新しい事象を従来の方法的枠組で裁断するのではなく、むしろ逆に、こうした新しい事象の意味を考え、そこから方法の枠組に問題を投げ返してゆくことが今日では極めて重要な課題となっているというべきでしょう。

その場合、勿論、一方では新しい事象を解明するために全く新しい方法的尺度が生まれてこなければならないわけではありますが、他方では、古典の意義を再検討し、古典の光をさまたげていた泥をとりのぞいて、その真の光沢を探りあてるという作業も欠かすことができないのはいまでもありません。今日までのところ一般に流布されている河上の像を整理してみますと、マルクス主義の方法にもとづく社会学者としては何ら特記すべき貢献を残さなかった啓蒙家という評価が優勢であり、その裏側では、社会学者というよりはむしろ宗教者としての河上が大きくクローズ・アップされてくるように思われます。だがしかし、日本資本主義論争の哲学的前提という根本問題にまでいまいちど立ち帰り、さらに新たに発掘された河上の遺稿類をも吟味することによって、社会科学方法論の探究という面から河上の像を再建することは、河上研究にとって残された一つの課題だというべきでありましょう。

以上、日本資本主義論争の意味を反省するなかで、方法論学者としての河上

の像を画きだすことにつとめてまいりました。それにしても、ここには私にとって解決できているとはとうていいえない問題が沢山残されているのを感じないではいられません。そうした残された未解決の問題をも含めて、河上のなかには正当に継承されなければならない学問的遺産がまだまだ沢山あるのだということを確認して、今日の講演を終わりたいと思います。

長い間ご静聴ありがとうございました。

— 了 —

本稿は、1972年6月3日、京都府立総合資料館においておこなわれた「河上肇記念講演会」の報告テープをもととし、それに若干の補正を加えたものである。文部省在外研究員としての出発を間際にひかえていたため、十分に推敲を重ねるいとまがなかった。この点、読者ならびに『経済論叢』編集部のかたがたにおわびしなければならない。

1972年7月31日 筆者